

知ってもらいたいこと②



スクールサポーター
(臨床心理士・公認心理師)
小林 真理

「ふつつ」の言葉

「そうは言っても、前はできていたのに…」とできていたことができなくなるって。また前のように戻るのかな、って考えちゃいます。」
こういった話は、発達障がいの子どもをもつ保護者の方からよく伺う内容です。前回の『こらぼ』では、子どもの立場から、自分の発達の偏りのことや、本人からみた「ふつつ」や「違い」について触れましたが、一方で親がどう考えているのかについて、今回はいただいたコメントを交えながら触れていきます。

「彼が『ふつつ』に苦しんでいるという事は、言葉としては理解しているけど、学校に行かないことどううまくいくのか。一日中ゲームをしていれば心の病気がよくなるのか。なんとか働いて食べて生活してきた両親としては『感覚』として理解できない部分です」と話してくれた家庭があります。

それまで学校に行っていたのに行けなくなると（行かなくなると）しまった、何か原因があるのか？何がいけないのか？あの時こうすればよかったのか？あの時こうすればよかったのか？何が正解なのか？など、堂々巡りする思いや不安は挙げたらきりがありません。また、いつまでこの状態が続くのか？将来は大丈夫なのか？社会にでてやっていけるのか？など様々な心配も尽きません。子どもがいる家庭であれば、このような不安や心配があるのは当然ですが、「ふつつ」を考慮することで、なおさら不安や心配が募っていくこともあるのです。

本人たちが「初めてのことが苦手」とわかっていても、少しでも体験や経験を重ねてほしいという願いから「ちよつとやってみれば？」と何気なく声をかけていたことで「ママは僕を一番不安にさせる」と言われた家庭もありました。親として一番身近にいて子どもの幸せを願っているのに、それが伝わりにくく、「じゃあ、どうしたらいいの？」とさらに悩んでしまうことや、「もう勝手にすれば？」と思うこともあるようです。

「マイノリティ（少数派）」には理解のある世の中になっ

ているけど、『ふつつ』ではないことへの違和感が社会にあることも事実。そのような社会が変わっていくのか、もしくは彼のような人たちが社会を変えていくことができるのか。「子どもの考えは、それはそれで正しいけど、そこに行動が伴っていない今の状況では、親としては社会から取り残されるといふ最悪の結果も踏まえつつ日々の生活を送っていきたく」と、話してくれた家庭もあります。

我が子をどう理解しているのか、どう信じていいのか、社会との折り合いのつけどころはあるのか、そんな思いがリアルに伺えます。親だからこそ、社会の厳しさを考え、我が子の行く末を案じる気持ちの方が大きくなってしまふのです。そのような中で「大丈夫」と信じて成長を見守り続けることは、親だからこそその尊い強さなのだと思います。

では、私たちには何ができるのでしょうか。いろいろとあると思いますが、一つには、より多くの人が「ふつつ」や「違い」など、多様性について目を向けながら、「ふつつってなに？」「違いつて何？」と考えてみることで、だと思えます。

子どもはどの子どもであっても、家族だけでなく、保育園や幼稚園、学校、地域の様々な人との関わりの中で育っていきます。だからこそ、発達障がいのことが少しずつ知られるようになってきていることで、私たちの「知ろうとする気持ち」や実際の関わり方によっては、子ども達が持っている力を発揮する場を作っていくこともできるのです。

今、新型「コロナウイルス」で「新しい生活様式」が変わってきているように、子どもたち本人、家庭、私たち一人ひとりが迷いながら悩みながら、一緒に新しい「ふつつ」に向かっている過程にあるのかもかもしれません。

発達障がいについて、一人ひとりが「言葉」と「感覚」の理解の幅を少しずつ広めたり深めたりしながら、違いを生かしていけるようになるとういことです。

軽井沢の植物と方言 45



鳥が植えた木？ ヤドリギ 寄生木

町内にも自生し、北海道、本州、四国、九州のサクラ類やミズナラ、シナノキ等の落葉広葉樹に寄生する常緑の小低木です。11月上旬から12月中旬頃、淡い黄色の実をつけます。ヤドリギの名前は、他の木に寄生して生活することから名づけられました。

方言と由来

- ①カラスノウエキ
サクラ類等に寄生する様子を鳥が植えたと考え名づけられたそうです。
- ②ハナゴンゴ
鼻の詰まった様をハナゴンゴといい、この実の粘汁を鼻汁にたとえて名づけられたそうです。

【参考文献】佐藤邦雄（1978）
信州佐久の植物方言